聖霊降臨後第26主日　特定28　C年　聖餐式・説教　　2016年11月13日

主よ　わが岩よ　わがあがない主よ　わが口のことば　わがこころのおもいをみこころにかなわしめたまえ　アーメン。

本日の福音書として選ばれています箇所は、ルカによる福音書21章5節－19節であります。イエスの予言（「終末の徴」）であります。この箇所は、共観福音書と言われています、マタイ、マルコ、ルカの三福音書全てに記載されています。そのことは、初代教会の人びとにとって、このイエスの予言は特に関心を持っていたものだったと考えられます。三福音書に記載されている内容は、ところどころ表現を変えてはいますが、ほぼ同じであります。

イエスは、旅を終え、エルサレムに入城して活動を始めます。エルサレムの指導者たちは、イエスの言動を見て（特に宮清めの言動を見て）苦々しく感じていました。イエスさえいなければと思いが強くなります。最終的にはイエスを十字架に架けて殺そうとします。そして、イエスを捕らえます。この予言は、捕らえられる寸前に語ったイエスの予言とされています。イエスが語っていますことは、十字架の死を覚悟した上での予言であります。ですから、弟子たちやイエスを慕っていた人たちへの、最期の言葉（遺言のようなもの）であります。と同時に、十字架の道へ向かうイエスご自身の、思いと覚悟が秘められている予言でもあったのだと考えられます。この予言を通して、苦しみや困難に境遇したとき、人はどのように対応すればいいか、を伝えたかったのではないかと思われます。イエスが何を思い、何を言おうとしていたのかを、今日は、みなさんと一緒に考えて行きたいと思います。

まず、最初にイエスは、エルサレム神殿を見つめ、「この壮大で立派な神殿は全壊される」と予言します。歴史的には、ユダヤは紀元66年ローマと戦い（ユダヤ戦争）敗れ、ローマから支配される国となります。そのとき、ローマ軍はエルサレム神殿の見事な奉納物や装飾品を持ち去ります。ユダヤ人たちは、自分たちの精神的支え、信仰の中心であった神殿をけがしたとし、反乱を起こします。そして、エルサレムに立てこもりローマ軍と戦います。ローマ軍は、威信をかけてエルサレムを包囲し、激しい戦いが始まるのです。紀元70年エルサレムは陥落し、そのときエルサレムと神殿は破壊されます。国は滅亡し、ユダヤの民は流浪の民となるのです。イエスの予言は的中します。福音書を書いた記者たちは、エルサレム神殿の崩壊を知っていて、編集したのではないか、と考える学者たちもいます。そのことに関しては詳しく触れません。今日は、この予言はイエスが語ったものとして考えていきたいと思います。

聖書に戻ります。イエスの予言を聞いた人びとは驚きます。神殿は神が存在

する場所であります。「いつ神殿の崩壊は起こるのですか。そのときどんな徴があるのですか」とイエスに尋ねるのです。

すると、イエスは答えられます。「まず、自分を救い主だと名乗る者たちが現れる。そのときはその人たちに惑わされないように。そして、戦争や暴動が起きる。そのことをおびえなくてもよい。それらは世の終りではない、世の終りはすぐには来ないからである。大きな地震や飢饉、疫病という社会を揺るがすような現象が起こる。そのときも心配することはない」と言われるのです。

イエスは質問に答えていません。しかし、ここでイエスが言おうとしていることは、「このことがら（戦争、暴動、地震、飢饉、疫病）は、決して世の終りの現象ではない」と言おうとしているのです。そのことは同時に「神殿の崩壊も世の終わりのしるしではない」と言おうとしているのではないかと思われます。わたしたちは「世の終わり」と言いますと、異常な出来事が起き、それで世界が破壊され、すべてが終わってしまい、「この世が滅びる」ことであると考えます。しかし、イエスの考えや、初代教会の人びとの信仰は違っていました。

彼らは、「この世の終わり」は、「神の国の到来・実現である」と考えていたのです。「世の終り」は滅び・暗黒ではなく、神の勝利の時であり、明るく、喜びの時であると考えていたのであります。わたしたちは、何か異常なことが起きますと「世の終りが近い」と思いがちです。しかし、イエスは惑わされ、おびえてはいけない「それは世の終りのしるしではない。終りはすぐには来ないのだから」と言われるのです。イエスは、何故「すぐには来ない」と言われたのでしょうか。初代教会の人びとは、大変なときを過ごしておりました。その苦しみから解放されたい、一日でも早く「勝利の時、喜びの日」を迎えたいと望んでいたのです。ですから、救い主の到来を強く望んでいました。しかし、なかなかそのときがやってきません。そこにはいら立ちや失望が生まれてきていたのです。イエスの「世の終りはすぐには来ない」と言う予言の言葉は、「もう少し、頑張って生きて見よう。来るまで待とう」と、希望を持てなくなっていく人びとの心の支えとなっていたのではないかと思われます。

そして、イエスは叩き込むように予言の言葉を続けます。その言葉は：12 であります。イエスは「しかし、これらのことが起こる前に、人びとはあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。そして、親、兄弟、親族、友人から裏切られ、殺される者もいる」と言います。「これらのことが起こる前」とは、偽救い主が現れたり、戦争や暴動が起きたり、地震や飢饉、疫病という恐ろしい現象があったり、神殿の崩壊が起きるときであります。ですからイエスは、それらのことが起きる前に、迫害が起きると予言するのです。それでも、「心配することはない」とイエスは言われます。どうしてかというと、迫害を受けることは「神を証をする

機会であり」、迫害する者が「対抗も反論もできないような言葉と知恵を授ける」という、神の働きを示すときになるからである、とイエスは言われるのです。

初代教会の人びとは、厳しい迫害を受けていました。イエスを信じることは、命がけのことであったのです。彼らは、十字架に架けられ死に、三日目に復活されたイエスのみを「救い主」として礼拝していました。そのことは、ユダヤ教からは異端、邪教とされました。そして、ローマからはローマ皇帝を神とはしませんでしたので、反逆者として扱われたのです。ですから、初代教会の人びとは、ユダヤ教とローマから徹底的に迫害されていたのです。

そういう状況ですから、イエス・キリストの信仰を捨てる人が出て来ますし、家族がバラバラになってしまう人もいました。そのとき、この迫害は「神を証する機会として与えられている」のだから、喜んで証をしなさい、そして、証として語る言葉と知恵は「ちゃんと用意してあげるのだから、心配しなくてもいい、大丈夫だ」と、イエスは予言の中で言われるのです。「心配しなくてもいい」という約束の言葉は、初代教会の人びとにとって、「こんな苦しい状況の中でも生き抜いて行こう」、という力になっていったのではないかと思われます。

でも、初代教会の人びとは、迫害があっても、すべての人が力強く生き抜いて行ったとは考えられません。背教する人が多数いたことは確かであります。しかし、迫害を受ければ受けるほど、信じる人（仲間）が増えて行ったことは驚きであります。パウロがコリントの信徒たちに出した手紙の中でこんなことを言っています。Ⅱコリント１：8－10 です。

> 「わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫され、生きる望みさえ失ってしまいました。わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょう。これからも救ってくださるに違いと、わたしたちは神に希望をかけています」

神は、わたしたちをどんなときにも守ってくださり、救ってくださる方である、という信仰が、わたしたちに生きる力を与えてくださるのです。初代教会の人びとが迫害を受けても、「神はわたしたちと共にいてくださって、わたしたちを守り、救ってくださる」、と言うインマヌエル信仰が、彼らを強く生かしていたのだと考えられるのです。迫害という苦難に立ち向かい、乗り越えていく力は、「神は共にいてくださる」という信仰から生まれていたのです。

そのことに関して、違う視点から考えて見たいと思います。本日の福音書は「忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい」と言う言葉で締めくくられています。この箇所を意地悪く聖書を読んでみます。「忍耐によって、命を勝

ち取れ」と言っていますが、文章の流れから考えますと、異常な現象や迫害があっても、忍耐をすることによって、生き抜きなさいと言っているのです。
「忍耐。苦しみを耐え忍びなさい」と言うのです。こんな無責任な言葉はないと思いませんか。普通、生きることに危険や苦しみがあれば、その状況を判断して、「逃げなさい」か「徹底的に戦いなさい」と言うのがちゃんとした指導者であります。「耐え忍びなさい」では、どうすればいいのかわからない人も出てくるからです。わたしならば、「どうしたら良いか指示をしてください」と不平を言うのではないかと思うのです。
　どうも「忍耐によって」という訳に引っかかり、おかしいのではないかと調べてみました。確かに、多くの聖書は「忍耐」「耐え忍ぶ」と訳しています。わたしの調べた限りでは本田哲朗神父の訳だけが、「めげずに立ち続ける」と訳されていました。「忍耐によって」の訳で間違いはないようです。

　しかし、この「忍耐」と訳されています原語、ギリシャ語は「ヒュポモネー」であります。「ヒュポ」は「何々の下に」「何々の元に」という意味であります。そして「モネー」は「メノー」と同じで「とどまる」という意味であります。その二つの言葉が合されて、一つの言葉になっているのです。そうしますと、「ヒュポモネー」は「耐え忍ぶ」「我慢する」ではなく「どこかにとどまる」という意味になってくるのです。すると、「どこにとどまるのか」が問題になってきます。それは、文脈から考えますと「神のもとにとどまる」ということになるのです。もう少し意訳しますと、「神に希望を持ちながらとどまり生き続けることによって、命を得ることができ、苦しみがあっても力強く生き続けることができる」、ということになるのではないかと思われるのです。

　「神のもとにとどまりながら生きる」ことは、本当にできるのでしょうか。確かに、見えない神のもとに信頼をもって、とどまることができるのか、と考えますと不安であります。しかし、それができるのではないかと思われる道が、予言の中に示されています。それは、イエスの予言は、全て「あなたがたは」という呼びかけになっています。「あなたは」ではないのです。「神のもとにとどまる」ことは、一人ではできないのです。イエスを信じる者全員で力を出し合い、協力し、助け合い、声を掛け合い、寄り添い合いながら、生きて行かなければ、できないということを意味しているのではないかと思われるのです。
　わたしたちは、「神は共にいてくださり、守っていてくださる」という、その神を信頼し、その神のもとにとどまり、つまずくようなことが起きると、仲間と助け合いながら、生きて行くときに「神の救いに」あずかることができる、と信じて、生きて行かなければならないのではないかと思われるのです。
　みなさまの上に、いつも神の祝福がありますようにお祈りしています。